

新・瘡我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第二十三回 感染症と闘う

新型コロナウイルスによる日本の国内死者数は、令和二年（二〇二〇）六月から令和五年五月までの四年間で七万四千六百九十四人であったと報道される。しかし、感染症による大量死の発生はこれが初めてではない。コロナに比してはるかに致死率の高いコレラの死者数は、明治十八年（一八八五）、明治十九年において十一万七千七百十五人、明治二十三年、明治二十四年において四万二千九百八十七人に及んだ。総人口が四千万人前後の時代のことである。明治期を通してのコレラ死者数は三十七万人を超え、その数は日清・日露戦争

の犠牲者数を上回ったという。人口集中度の高い東京で事態は一段と深刻であった。

明治のコレラ禍を契機に高まったのが、飲料水・下水改良への官民の認識の高まりであった。政府による水道事業計画が開始され、玉川上水を水源とする淀橋浄水場の建設は空前の規模を誇った。

「お雇い外国人」として来日、東京帝国大学工科大学で衛生工学の講座を担当したのが、スコットランド人のウイリアム・バルトンである。バルトンは学生指導に当たる一方、淀橋浄水場建設に従事。事業完遂に向けて邁進するバルトンの背中をみつめ

ながら、水道工学の道に生涯を賭す決意を固めたのが工科大学土木工学科学生の浜野弥四郎であった。

コレラ禍はどうか収束に向かったものの、清国から日本に割譲された台湾での感染症の蔓延が著しく、その劣悪な衛生環境に改善の道をつけなければ統治自体が開始できない。台湾は「瘴癘の地」といわれていた。「瘴」とは南方の山川の毒気によって起こる病、癘とは流行病のことである。マラリア、ペスト、コレラなど台湾にはびこる疫病にどう対処すべきか。日清戦争後の帰還兵士の検疫事業で力量を認められ、内務省衛生局長に復していた後藤新平にとっても重大な関心事であった。『国家衛生原理』の実現の場を台湾に求めたいという後藤の意気関心をさらに強めた。

誰を台湾に派し彼の地の上下水道建設事業に当たらせるか。内務省の初代衛生局長の長與專齋が後藤に推薦したのがバルトンである。後藤は直ちにバルトンに会う。バルトンはあたかもそれが天命で

あるかのごとくにこの申し越しに応じた。すでに台湾の感染症についての知識を仕入れてもいた。忠勇なる学生の浜野を同行させることだけがバルトンの唯一の条件であった。

明治二十九年（一八九六）の夏、バルトンは総督府衛生工事顧問技師委嘱、浜野は衛生局技師として着任した。二人を迎えてくれたのは民政局長の水野遵だった。都市の人口数が不明、地図さえない、降雨量や河川流量も不分明、洪水記録は消失しているという。台北を皮切りに各都市の上下水道工事計画書を作ってほしいという。

後藤新平が台湾に赴任してきたのは明治三十一年（一八九八）三月のことだった。バルトンと浜野は後藤の着任を待ち焦がれていた。後藤もまた着任したらまず会おうと考えていたのがバルトンと浜野であった。後藤は二人が作成し、総督府を通じて衛生局に送付されていた「衛生工事調査報告書」を事前に読み込んでいた。

そこに精細に書き込まれている主要都市の上下

水道計画と市区改正計画について、この二つは台湾の将来を決する課題である、後者は自分がやる、前者については二人に任せる、そのための予算は自分が何とかするので大いに奮闘してくれといひ、待たせてある公用車ですぐに消えてしまった。着任直後の超多忙な日程のなかで、あの後藤が何をさておき会いにきてくれ、しかも調査報告書に記されていることの重要性についてはつきりと理解していることを知って二人は嬉しかった。

当時の台北は、大稻埕、艋舺、城内の三つの地域にわかれていた。大稻埕は泉州、艋舺は漳州からの移民が集中している。バルトンと浜野は艋舺に踏み入って息を呑む。「これが人間の住まうところか」。先の衛生工事計画書にはこう記されている。

「艋舺は衛生工学的にみて最も劣悪な市街地であり、コレラなどの伝染病の発生源となる。ここから台北全域に病原菌が拡散していくのは間違いない。台北を無病の地とするには艋舺をこのままにしておいてはいはずがない。かといって改良は至難

である。艋舺のすべてを取り壊し最新の衛生学の知見をもつてここを再建するより他に策はない」

しかし、バルトン、何とマラリアに冒され苦しむことになった。一時小康を得たものの、次第に重篤となる病苦を抱えて望郷の思いを深め、スコットランドに帰国しようと立ち寄った東京にて死去。

浜野が二十三年の歳月をかけて完工した諸事業を振り返り、台湾を去るに際してその細目を整理した事業大鑑のごとき記録が『台湾水道誌』である。その冒頭にこうある。

「顧問技師バルトン氏は台北水道水源調査に苦心せられ其新店溪上流の踏査に当りては炎暑淫雨を顧みず蕃山深溪を跋涉して好適水源の発見に努力せられしも不幸中途にして風土病に犯さるゝに至り遂に明治三十二年八月五日笏焉として客地に長逝せられる。実に衛生工事計画の為最先最大の犠牲者たらずんばあらず。しかれども本島衛生工事業の基礎は当時既に同氏に依りて確立せられ、現今に至る迄其計画を継承し以て之を全島各地に

施行しつゝあるを見れば氏も亦以て瞑するものあらんか」

自分のやり遂げた事業はすべてバルトンにより計画されたものであり、自分はその計画にしたがつて事を進めたに過ぎない、といつて師を追慕した哀切の一文である。

上下水道ばかりではない。総督府は台湾統治開始直後の明治二十八年に台北に台湾病院を設立、翌二十九年には台中、台南にも総督府病院を開設、次第に各都市へとこれを広げていった。さらに総督府が本土から医師を招き、各地の受け持ち地域を確定したうえでそれぞれに「公医」を置く制度を発足させた。台湾に猖獗する伝染病の防疫に当たる最前線に公医を布陣したのである。明治三十年には台湾住民の子弟を医師として養成するため医学講習所を設立。総督府台北病院はのちに台北帝国大学医学部附属病院となつていまに引き継がれている。

アヘン吸引者の漸禁にせよ感染症の克服にせ

よ、これに成功したからといつてそれ自体は台湾の開発でも近代化でもない。しかしその成功なくしては台湾の開発のための「初期条件」は整えられず、開発がスタートすることもできない。後藤は「台湾統治救急案」においてこういふ。

「動物ガクク寒暑ヲ凌ギ、飢渴ニ堪ヘ、境遇ニ順応シテ生存スルガ如ク、吾等ハ時ト処ニ随ヒ、克ク諸般ノ困難ニ打勝チ、施設肯綮ヲ得テ、台湾経営ノ光輝ヲ発揚セザルベカラズ」

後藤という確固たる統治思想をもつた一代の官僚政治家がなした大いなる成果に違いない。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア」停滯のアジアで吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇一一年、正論大賞。